ハーレムプレリュード

Harem Prelude

竹内けん

挿絵：A.S.ヘルメス

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
ガラテイア
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

CHARACTERS

セリューン

アドリアン領主を継ぐ美少年。圧倒的な文武の才と父親の事件で国中から注目を集めている。

リサイア

『輝鬼衆』のくノ一。新米で小生意気だが没落した里のためセリューンに協力する。

メルディス

国内随一の女騎士で実力は本物。姉御肌でエイドリアン、アンジェリーナと並んで三大美女と呼ばれている。

マリージェーン

ラルフィントの王家の血を引く王妃。身体が弱く、娘マリーシア誕生後、離宮で静養中。

エイドリアン

新宰相ボーネットの孫で母はグラウディア。美人ではあるが高慢。部屋にはウサギの置き物がいっぱい。

グラウディア

エイドリアンの母。社交界では有名で多くの男性と浮き名を流した。まだまだ現役。

第一章　アドリアン城主　009
第二章　初陣の前夜　048
第三章　悪魔の子　085
第四章　ご乱行の日々　121
第五章　優しい王妃殿下　162
第六章　運命の女　211

「ごくり」
ショーツはすでに脱いでいる。
食い入るように見つめてくる少年の視線を楽しみながら、お姉さんはゆっくりとスカートをたくし上げた。
むっちむちの白い太腿が二本。それがやがて結合する部分には、金糸のような陰毛が彩りを添えていた。
「うわ、毛がボーボーだ」
「お、大人はみんなこうよ」
さすがのメルディスも恥ずかしそうだ。
その場で跪いたセリューンは、かぶりつくように女性の股間に顔を近づける。
「ちょ、ちょっと……」
さすがに逃げようとするメルディスに、セリューンは涙目で拝みみる。
「お姉さんもぼくのおちんちんに触ったじゃないですか？　ぼく、女性のことをいろいろと勉強したいんです。中までよく見せてください」
「し、仕方ないわね……」
セリューンの童貞ぶった演技に、ショタ心を刺激されたメルディスは、頷いてしまった。
「それじゃ、この姿勢ではよく見えないので、股をもっと開いて、お尻をこちらに突き出

してください」
「はぁ～、このガキ、調子に乗って……」
「お姉さんはぼくの女でしょ？　命令に従ってください」
口では偉そうにしながらも、子犬のような表情で懇願されメルディスは、ドキュンッと胸を射抜かれたかのように悶えたあとに、頷く。
「わかったわよ。これでいいの？」
セリューンに背を向けたメルディスは両足を肩幅の倍ほどに広げると、前かがみになり、両手をそれぞれの膝に置いた。
（うわ、尻でか⁉）
さすが鍛えられた女の尻である。単に大きいだけではなく引き締まっており、肌もパンと張っている。
セリューンは今まで女性の尻に興味を持ったことはなかった。主に顔と胸で判断していたのだが、女尻の魅力に目覚めるのを感じた。
「これって女にとってかなり恥ずかしい恰好よ。キミがどうしてもというから特別にやってあげているんだからね。感謝して欲しいわ」
「ありがとうございます」
素直に感謝したセリューンは、両手で尻を持つと、尻朶を左右に開く。

「あはっ、お尻の穴まで丸見え、お姉さんでもウンチするんですね。アナルまで綺麗だ」
無邪気さを装いながら、セリューンは尾骨に接吻したあと、指で肛門に触れて、それから会陰部を通り、半開きになった陰唇を撫で下り、さらに下の突起に触れた。
「あん♪」
メルディスが漏らした甘い声に、セリューンは舌なめずりをする。
「これがクリトリスですか？」
「そ、そうよ」
濡れた指で優しく揉みこむ。
「やっぱり気持ちいいの？」
「ええ、ええ」
中腰で尻を突き出すというつらい姿勢にありながら、メルディスは頷く。
ついでセリューンは、陰唇を左右に豪快に割った。
「こ、こら剥きすぎよ！」
さすがのメルディスも悲鳴を上げる。
「へぇ～、これがオマ〇コなんですね。綺麗だなぁ」
褒められると悪い気がしないのか、メルディスは抵抗をやめた。
それと察してセリューンは遠慮なく、大人の女の生殖器を観察する。

（やっぱり、全体的にリサイアのやつより大きいな。それに濡れ濡れ、生ハムみたいな肉がヒクヒクしている。エロ♪）

ついで右手の人差し指を、膣穴にズボリと入れた。

「ひぃ！」

「さすがお姉さん、中までヌルヌル。おちんちんを入れるの楽しみだなぁ」

無邪気さを装いながら、セリューンはさらに左手の中指まで入れてしまい、ぐいっと左右に拡げた。

「ちょ、ちょっと」

「へぇ～、オマ〇コってこんなに広がるものなんですね。まぁ、赤ちゃんがでるところでもあるんですし、当然か」

「あ、こら！　そんなところを魔法光で照らすな！」

少年の残酷なまでの好奇心にさらされて、傲慢なお姉さんはほとんど半泣き状態だ。

セリューンは女性のもっとも秘密の穴を、魔法光で照らしながらのぞき込む。

「ねぇ、お姉さん。ここに少し膜っぽいものあるけど、これなに？」

「そ、それは……」

メルディスが動揺した声を出して言いよどんだところで、セリューンはニヤリと黒く笑った。

「処女膜ですよね」
「……」
押し黙るメルディスを、セリューンは追い詰める。
「実は輝鬼衆に命じて、お姉さんの身辺を洗わせてもらいました」
「なに……？」
「その結果、お姉さんの周りには、付き合っている男性の影なし」
膣穴をのぞき込まれながらのセリューンの指摘に、メルディスは押し黙った。
「……」
「まさかとは思ったんですよね～、でも、この処女膜を見て確信しました。メルディスさん、処女ですね」
初潮も来ていない少女とは違って、成人女性の処女膜は、たとえ経験がなくとも、月経を通すため、少し膜は破れているものだ。
それにスポーツをする女性は自然裂傷をしやすいといわれる。まして、馬に跨がることを日常とする女騎士は、処女膜がなくなっている場合が多い。
指の一本や二本入る程度に破けていても、未経験は未経験である。
「お姉さんプライド高いもんね。いまさら処女だって言えなかったんでしょ。ぼくみたいな[redacted]相手なら、上手くごまかして処女捨てられるとか考えていました？」

年下の少年に嘲笑されて、メルディスは顔を真っ赤にする。
「し、仕方ないでしょ。あたし好みのいい男がなかなかいなかったんだから」
慌てたメルディスは言い訳した。しかし、これは墓穴を掘ったというものだ。
単なる推論が確信に変わる。
「うわ、散々経験豊富なお姉さんぶっていたくせに、処女だなんて恰好悪ぃ～～～♪」
「キミわかっていて、演技していたわけ？　性格悪いわよね」
「それはお互いさま」
嘲笑しながら立ち上がったセリューンは、いきり立つ逸物を、メルディスの処女膜のほとんどない処女膣に添えた。
「いろいろ教えてもらおうかなって思ったけど、処女じゃなにも知らないですよね。ぼくのほうで勝手に入れさせてもらいます」
「あ、こら、このガキ……あっ」
スポンッ！
お子様逸物は、今が旬といった感じの綺麗なお姉さんの体内にあっさりと飲み込まれた。
「はい。これでお姉さんは処女卒業です。おめでとうございます。お姉さんが処女だったってことは内緒にしてあげますよ。ぼくとお姉さんだけの秘密です」
「このガキぃぃぃ」

暴れようとするメルディスの両腕を、それぞれの手で持って左右に開く。
いわゆる立ちバックの体勢で、セリューンは腰を動かし始めた。
さすがに身体が大きいだけあって、膣洞もリサイアより広めだ。
「あはっ、これがお姉さんのオマ〇コですか。わ、悪くない。悪くないけど……いや、すげぇ気持ちいい、最高に気持ちいい」
悪ぶろうとしたが、無理だった。
初めは緩いような気もしたのだが、すぐにミチッと締まってきたのだ。
(ちんちん蕩けそう……って蕩ける！　やっぱ綺麗なお姉さんって、オマ〇コもすごいんだ)
我を失ったセリューンは、猿も恥じらうような勢いで、ガツガツと腰を叩き込む。
「あん、いきなり、激しすぎ、こっちは初めてだってわかっているんだから、少しは遠慮しなさいよ、あん、あん」
女の身など気にしていない。いかにも童貞臭い、若さに任せた突き上げを食らって、前方に突き出された二つの乳房がプルンプルンと揺れる。
「こ、こいつ、調子に乗りすぎよ、えっ!?」
ドビュビュビュビュビュ……。

「はぅ……」
口内に含まれて唾液漬けにされたことで、たしかに空気に触れているときよりは楽になった。しかし、痛みが完全に消えたわけではない。鈍痛とともに、刺すような快感が襲い来る。
重石がなくなったことで、セリューンはほとんど無意識にうつ伏せになった。
四つん這いになって逃げようとしたということもあるが、泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、大きな枕に顔を埋めたのだ。
そのため逸物を咥えていた裸のエイドリアンは仰向けになる。
「あらあら、まるで処女を失った乙女みたいね」
嗜虐的に笑ったグラウディアもまた、膝立ちになって高く翳されているセリューンの小さな尻に顔を近づけた。
かぷ！
「あう」
グラウディアの口が、肉袋を捕えた。
男にとって、もっとも大事で、脆い部分を、おっかないおばさまの口腔に捕えられてしまった。

枕に顔を埋めたセリューンは、泣きながら高く翳した尻をプルプルと震わせる。
（もう、らめ……）
おっかないおばさまに咥えられしゃぶられている肉袋の中にある、二つの睾丸が躍り、溢れ出した精液が、肉棒を駆け下り、意地悪お姉さんの口内で噴出した。
ドビュビュビュビュ!!!
「うぐ」
エイドリアンは驚きのうめき声を出す。
やがて断末魔のような射精を終えたセリューンはぐったりと脱力し、エイドリアンは逸物から口を離して、身を起こした。
「あら、どうしたの？」
複雑な表情をして口元を押さえている娘の姿に、グラウディアは小首を傾げる。
「好きな男の子のザーメンでしょ、飲めばいいじゃない」
「うー」
そういう問題ではなく、やはり経験のない娘としては、生理的な抵抗があるのだろう。飲みたくとも喉を通らないらしい。だからといって、吐き出すこともできないようだ。
「まったく、我が娘ながらだらしないことね」
グラウディアはいきなり娘の唇を奪った。そして、口内のものを吸い出すと、ゴクリゴ

クリと嚥下する。
「ふぅ〜、やっぱり濃いわね」
満足げな母親の姿に触発されて、エイドリアンも慌てて、口内に残った残滓を嚥下する。
「ごほん、ごほん、ごほん」
「ほーほほ、初心だこと」
咳き込む娘の姿に、グラウディアは高笑いする。
「それでどお、坊やのほうは落ち着いた？」
「ひ、ひどいです」
なんとか落ち着いたセリューンは、恨みがましい顔で、グラウディアを睨む。
「あなたを一人前にするために憎まれ役を買ってあげたのよ。今は憎くても、将来的には感謝してくれることになるわ。それにしても、さすがね。一度射精した程度では、小揺るぎもしないわね」
グラウディアが見たのは、セリューンの逸物である。
射精したばかりだというのに、逸物は臍に届かんばかりに反り返っている。
「さぁ、次は坊やの好きにさせてあげるから、機嫌を直しなさい」
そう嘯いたグラウディアは、不意にエイドリアンを背後から抱きしめると、そのまま仰向けになった。そして、娘の足ごと大股を開く。

「ちょ、お母さまっ⁉」
エイドリアンは驚くが、グラウディアは平然と促す。
「オマ〇コ、興味あるでしょ。どちらも好きにしていいわよ」
（オマ〇コが二つ、縦に並んでいる）
想像もしたことがなかった光景に、セリューンは目を剥いて魅入ってしまった。
「さぁ、小娘の小便臭い処女オマ〇コと、わらわの磨き上げられたオマ〇コ。どちらに入れたいかしら？」
「そんな、いろんな男のザーメンで穢れたオバサンのオマ〇コより、あたくしのぴっちぴちのオマ〇コのほうがいいに決まっているでしょ」
「ふん、その手のもてない女の僻みは聞き飽きているの。女はザーメンを浴びるほどに輝きを増し、具合がよくなりますのよ」
究極の二択を前に、セリューンは眩暈を感じた。
（なんてゴージャスな光景なんだ）
グラウディアも、エイドリアンもど派手な美女美少女だ。それが二人並んで股を開いて手招きしているのだ。
陰毛は二人とも頭髪と同じ漆黒だ。
ただし、密度が違う。グラウディアのほうが圧倒的に濃い。エイドリアンは質量ともに

少ない。肌が白くなければ、無毛なのではないか、と思ってしまうほどだ。
グラウディアは濃くもじゃもじゃだが、醜くはない。手入れがされているのだろう。色気を感じさせる光景だ。
（あは、オマ〇コの匂いも違う）
おそらくグラウディアは、陰唇にも香水を振りかけているのだ。
さすがは酸いも甘いも噛み分けた往年の大貴婦人。隙がない。
エイドリアンの陰唇とて、別に不快な匂いはしなかった。それどころか、先ほど風呂場で丁寧に洗ってきたのだろう。石鹸のよい匂いがする。
セリューンは両手の人差し指でエイドリアンの陰唇を開き、親指でグラウディアの陰唇を開いた。
「ああ、お母さま、この恰好はさすがに恥ずかしいですわ」
「我慢なさい。若い娘と比べられているわらわのほうが恥ずかしいわよ。でも、この恥ずかしさがセックスの醍醐味だわ」
恥辱に震える母子の陰唇を、じっくりと見比べる。
エイドリアンとグラウディアは、さすが母子だけあって体型的にも似ている。
エイドリアンの十五年後がグラウディアで、グラウディアの十五年前がエイドリアンだったのではないか、と想像させる程度にそっくりだ。

（こうやってみるとオマ〇コの形もどこか似ているな。なんというか使用後、使用前といった感じだ）

グラウディアの陰唇は、セリューンが見たどの女性よりも大きめでビラビラしている。さすが経産婦といった貫禄だ。

一方でエイドリアンの陰唇は、綺麗な鮮紅色だ。型崩れもしていない。同じ処女でも、メルディスのように馬に乗り、日常的に圧迫している、ということがないからだろう。

ちなみに、毛の一本も生えていなかったツルペタ娘は問題外だ。

（あは、エイドリアンさんには、処女膜がある。グラウディアオバサンには、処女膜がない）

ちなみにエイドリアンの処女膜は、真ん中に一本の膜が残っている、二穴型だった。

二人とも媚肉を痙攣させて、トプトプと蜜を溢れさせている。

「両方ともいただきます」

セリューンは、二つの陰唇を一つであるかのように、下のグラウディアの陰唇から、上のエイドリアンの陰唇まで豪快に舐めあげた。

「ひぃ」

「ああん」

母子は恥辱の牝声を上げた。

（なんて贅沢な味なんだ）
熟成された芳醇な蜜と、採れたての甘美な蜜。二つを混ぜ合わせて、よりゴージャスな蜜にして味わうのだ。
「もう我慢できない！　入れていいんですよね！」
牝蜜の味に酔いしれたセリューンは、常の余裕などかなぐり捨てて叫んだ。
「ええ、お好きなようにしてちょうだい」
「あ、あたくしも初めてですから優しくお願いしますわ」
「はい。わかっています」
余裕なく応じたセリューンは、いきり立つ逸物をまず、エイドリアンの膣穴へと押し入れた。切っ先に処女膜の抵抗を感じる。
「くっ」
エイドリアンの緊張した顔を見て、思い直したセリューンは、逸物を下の陰唇へと移した。
じゅぽっ。
「あん、入りましたわ」
グラウディアが歓喜の声を上げる。
（うわ、なにこの感じ、メルディスのとぜんぜん違う）

「王妃様らしいしっとりとしたオマ〇コだ。ヌルヌルの襞がおちんちんに絡みついてくるんだ。トロトロのオマ〇コがヒクヒクしていて最高に気持ちいいよ。王妃様はどお？　オマ〇コにぼくのおちんちんを食べた感想は。気持ちいい？」

「……」

「オマ〇コ気持ちいいなら、気持ちいいって言って欲しいな」

押し黙るマリージェーンに、セリューンはしたり顔で迫る。

「それじゃ、これならどうですか？」

セリューンは、乳首への吸引を強くする。さながら母乳を絞り出すように吸引しながら、同時に腰を踊るように大胆に、それでいて高速で振るった。

グチュグチュグチュ……。

「ひぃぃ、駄目、そんな激しくされたら！　ああ、気持ちいい！　気持ちいい！　気持ちいい！　オマ〇コ気持ちいいの！」

清純派で優しい、お姫様がそのまま王妃様になったような世間知らずなお方が、ついに肉欲に堕ちた。

両手でセリューンの頭を抱き、我を忘れた牝声を張り上げてしまう。

「いけないわ。こんなことといけないのに……ああ」

背徳感ゆえに快感がいや増しているようだ。若い牡に陵辱され、貞淑なる王妃は涙を流

しながら悶絶する。
（うわ、色っぽい）
情感たっぷりの人妻をえぐりまわしながら、若い牡もまた追い詰められた。
「くっ、そろそろ出ます」
「駄目、それだけはやめて！　外に出しなさい！」
「ヤダ」
必死に抵抗するマリージェーンを組み敷いて、セリューンは情け容赦なく、逸物を思いっきり押し込んだ。
切っ先にゴリッとしたものがあたる。
「はぅ」
マリージェーンは常の気品もなく、大口を開けた。
どうやら子宮口を捉えてしまったようだ。女性は本気で感じているとき、妊娠しやすいように子宮が降りてくる。
「中に出します！」
宣言と同時に、子宮口に亀頭部を押し付けたままゼロ距離射撃をした。
ドビュビュビュビュ……。
「ひいいいいいいいいいい!!!」

子宮に直接、若い牡の活きのいい精液をたっぷり浴びせられる。
「気持ちいい、オマ〇コが気持ちいいの♪」
牝としての根源的な喜びにさらされて、マリージェーンは背筋を弓のように反らせて絶頂した。
すっかり惚けてしまった王妃の体内に思う存分に射精してから、セリューンは乳房から顔を上げた。しぼんだ逸物は入れたまま、乳房を優しく揉んで後戯を施す。
「はぁ〜、気持ちよかった。さすが王妃様のオマ〇コですよね。見た目が綺麗なだけじゃなくて、形や締まりも絶品。オルシーニ王国随一の名器だ」
「お、大人をからかうものじゃありません」
口では怒ってみせながらも、まんざらでもない顔になってしまうのは、女としてやむを得ないサガといったところだろう。
こうやって褒め称えるのも、女ったらしゆえの処世術だ。
マリージェーンは下腹部を軽く撫でて溜息をつく。
「はぁ〜、お腹いっぱいよ。まったく、こんなに中に出して。妊娠したらどうするの？」
「マリーシア姫に弟か妹ができて喜ばれるじゃないですか？」
「バカ……」
マリージェーンとて大人の女である。あとでちゃんと魔法で処理することだろう。

避妊の心配はまったくしていないセリューンは、再び硬くなった逸物を支点に、マリージェーンの身体を反転させて、うつ伏せにした。

「まだやるの？」

「当然です。ぼく[redacted]だし、おちんちんの大きさでは陛下に負けると思いますけど、その分体力はあります。ガンガンやって必ず満足させますね」

マリージェーンは、大きな枕に顔を埋めて、むっちりとした尻だけ高く翳した。

「もう、好きにしていいわ」

「くっくっくっ、口とは裏腹に王妃殿下の身体は、お尻の穴までヒクヒクして喜んでいますよ」

「意地悪……」

マリージェーンは拗ねた声を出す。人妻というにはあまりにもかわいい反応だ。

その精神構造は、清純なお姫様時代から変わっておらず、年だけへて淑女になってしまった女性なのだとよくわかる。

セリューンは両手を伸ばし、マリージェーンの腋の下から手を入れて乳房を揉みながらズコズコと掘削作業を再開した。

「あっ、あっ、あっ、あっ、いいわ、いいわ、いいわ、そこいいの……」

一発注ぎ込まれたことで、開き直ったのだろう。アニマルスタイルの王妃は気持ちよさ

そうに喘ぐ。
そんな中、不意にセリューンは腰の動きを止めた。
「……えっ？」
戸惑うマリージェーンに、セリューンは意地悪く促す。
「今度は王妃様のほうから、腰を使ってみてください」
「そ、そんなことできないわ」
「遠慮しないで、お好きなように使ってください。ほら」
パン！
セリューンは右手で、マリージェーンの白桃のような尻を叩いてやった。
「あん、やめて。……こ、これでいいの」
屈辱に震えながらマリージェーンは、自ら高く翳した尻をくねらせ始めた。
クチュクチュクチュ……。
単に前後に動くだけではなく、「の」の字を描くように円運動をしてみせる。
「あれ、エッチ苦手だって言っていたわりに、腰使いは上手いじゃないですか？」
どんなに上品ぶっていても、人妻は人妻だ。男にやられる習慣が身体に染みついているのだろう。
セリューンの嘲笑に、枕から目だけ後ろに向けたマリージェーンは拗ねた声を出す。

「王妃たるわたくしにこんなことを強いるなんて、ひどい子」
「でも、気持ちいいでしょ。王妃様って絶対にどマゾだから」
セリューンの決めつけに、さすがのマリージェーンも怒る。
「そ、そんなことないわよ。普通、いえ、どちらかといえば性欲は弱いほうで……」
「性欲の弱い人は、こんなグチュグチュのオマ〇コをして、いい声で啼きませんよ」
嘯いたセリューンはマリージェーンの括れた腰を捕まえると、再び腰を動かし始めた。
パン！　パン！　パン！
男の腰と女の尻が激しくぶつかり合って、拍手音が上がる。
「あっ、あっ、あっ、あっ」
獣のように四つん這いになったマリージェーンは、涎を噴きながら悶絶する。
「王妃様、また出します」
「駄目、もうお腹いっぱいよ。さっきあなたのものでお腹いっぱいになっているの。これ以上、出されたら、破裂してしまうわ」
「大丈夫。子宮の中にたっぷり注ぎ込んであげます」
「ダメ――――!!!」
再び膣内射精をされたマリージェーンは、尻を高く翳して、ビクンビクンと痙攣する。
「あは、また出しちゃった。王妃様のオマ〇コ気持ちいいからやめられないよ。次は王妃

様が上になって」
セリューンは結合を解かず、男女の位置を逆転させた。
寝台にセリューンが仰向けになり、この腰の上にマリージェーンが跨がった形だ。つまり騎乗位だ。
「さぁ、王妃様、好きなだけ腰を使っていいですよ」
「わたくしはこういうの、苦手だといったでしょ」
羞恥に顔をゆがめながらも、年下の少年の命令に逆らえず、気弱な王妃は自ら腰を動かす。
「ああ、これでいいの」
騎乗位というのは、女が好きなように腰を動かせるだけあって、自然と自分の気持ちいいところを見つけて、オナニー感覚で高まっていってしまうものだ。
成人女性としては平均的だろう乳房が、たぷんたぷんと揺れて、少年の視界を幻惑する。
セリューンは両手を伸ばして、白い乳房を鷲掴みにして、ピンクの指の跡が残るまで揉みしだいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション 検索